

■講演会 第2部

「新潟湊と直江兼続」

講師 作家 火坂雅志氏

歴史小説家の火坂雅志です。

今日は、来年のNHK大河ドラマ「天地人」について話そうと思うのですが、またいつもとは少し趣が変わりまして、新潟市と「天地人」のかかわりというテーマで話させていただければと思います。

第1部では、新潟市歴史博物館の長谷川伸学芸員から、新潟湊の成り立ちとその歴史、直江兼続の時代にこの新潟湊をめぐる攻防戦が行われたというお話があり、戦国の新潟に思いをはせる機会を得ました。私は小説家ですので、よりドラマチックに、人物中心にお話しいたしまして、さらに戦国のロマンに思いをはせていただければと思います。

まず、「天地人」が今、どうなっているかという概況から入ります。今年の8月の終わりから、東京の渋谷にありますNHKのスタジオで撮影が開始されました。私も励ましに行きましたが、スタジオというのは大きいものです。これぐらい（市民プラザのホールを指す）ありましたでしょうか、その中に家が1軒ありました。雪国の家が建っておりました。どういう家かといいますと、直江兼続の生家です。直江兼続の生家樋口家は、今の南魚沼市（旧六日町）の坂戸城下にありました。その樋口家の茅葺き屋根の武家屋敷が再現されており、その家の中にちゃんと囲炉裏が燃えていまして、ぱちぱちと弾けておりました。

スタジオでは直江兼続の子ども時代を撮影していました。ドラマの1回目でしょうか、かなり早い段階のものです。まだ、直江兼続が子どもの時代ですから、そこには妻夫木聡さんは出ておらず、かわいらしい子役が出ていました。お父さん樋口惣右衛門役の高嶋政伸さんと、お母さんお藤役の田中美佐子さんが囲炉裏を囲んでいろいろ話しているのです。冬で寒いので雑炊でも食べていたのでしょうか。あれが少年時代の直江兼続だと思ひまして、プロデューサーに「あっ、兼続がいますね」と言ったのです。そうしたら「違います。あれは直江兼続ではありません」と。「誰ですか」、「弟の大国実頼です」。子ども時代直江兼続は樋口与六、弟の大国実頼はそれより2歳下で与七と呼ばれていまし

た。この与七、のちのち小国家へ養子に入り、さらに大国実頼と名前を変えますが、その実頼だということです。実頼はのちに岩室温泉の近くの天神山城の城主になります。その実頼の子役がいたのです。

「兼続はどうしたのですか」ときくと、プロデューサーが庭の向こうを指しました。庭には土が敷いてありました。普通の地面に立っているのと変わりがなくて、木が枝を伸ばしていて、さらにその向こうに林のようなもの、一番向こうに八海山など魚沼の山々の写真が貼ってあります。普通に見てみますと外にいるようにしか見えません。大根とか、ネギなども植えられていて、思わず食べたいなと思ってしまうような庭でした。庭の向こうには納屋があり、少年兼続はそこに閉じ込められていました。「どうしたのですか」と私はおもわずききました。

坂戸の城主は長尾政景で、上杉謙信の一門です。その奥さんが仙桃院で、上杉謙信のお姉さんです。そして2人の間に男の子が生まれました。これがのちに謙信の跡を継ぐ上杉景勝です。この上杉景勝を北村一輝さんが演じます。仙桃院は高島礼子さんという、またきれいな女優さんが演じます。その仙桃院がお城の向こうから歩いてくる兼続を見つけたのです。5、6歳くらいだったと言われています。非常に利発な顔をしていまして、あいさつする姿も凛々しい。この子は将来、立派な侍になるに違いないということで、自分の産んだ息子の景勝の小姓につけようと考えます。小姓というのはご学友です。子どもと一緒に若殿様と相撲を取ったり、学問に励んだりしながら、一緒に成長していく。その若殿様が成長して、本当の殿様になりますと、彼らは側近として政治を動かすようになるという役割の人間ですから大変重要なのです。

あの子がいいということで、仙桃院が目止めました。そして、父樋口惣右衛門に、ぜひ与六を私の産んだ息子の景勝の小姓につけたいということです。樋口惣右衛門は家臣ですので、城主の奥方の命令には従わなければいけない。大変名誉なことですから、城へ登れと言うわけです。ところが兼続は「嫌じゃ」と言います。5、6歳ですから、まだお母さんに甘えていたい。お父さんのそばにまだいたいと言って嫌がるのです。駄々をこねるのです。それで父親の樋口惣右衛門は、「何を言っている、お前は侍の子であろう」と怒るのです。それでも「嫌じゃ」とあまりに言うもので、こらしめのため納屋に閉じ込めてしま

ったわけです。

家族3人で夕御飯を食べていて、私が行ったときには、ちょうどお母さんが、「お父さん、まだあの子は子どもなのです、許してやってください」と言っていました。そしたら、お父さんが箸を「ぼしん」と置いて、「だめじゃ、やつは侍の子じゃ」というシーンをやっておりました。おそらく来年の1月4日にスタートする「天地人」の1回目か2回目でそういうシーンが出てまいりますので、そのときには火坂雅志が言っていたシーンが出てきたぞと。自分だけ知っているということで、笑っていただければと思います。

そのほかロケも新潟県内で行われておりまして、上越市の柿崎海岸で9月6日でしたか、主演の妻夫木聡さん、そして奥さん役のお船の方を演じる常盤貴子さんが海岸を馬で走って来るのです。そうすると、雨が降ってまいります。たまたま降ってきたのではなく、放水車で雨を降らせたのです。やはり大河ドラマというものはすごいなと思いました。美術、制作スタッフの車両が連なっていて、ロケバスと言うのでしょうか、大きな車両が何台も。それが20数台でした。先ほどもお話した放水車もありまして、ただ水を降らせるだけの役目のものもあるわけです。さすがに大河ドラマというものはすごいなあと本当に思いました。

2人は、にわか雨でびしょびしょになります。まだ結婚する前で10代ころの話です。漁師小屋へ2人でずぶぬれになりながら駆け込むのです。寒いので囲炉裏の火をつけます。濡れていますから、衣服を乾かさなければいけなくなる。さて、その後、どうなったでしょう。これもたしか第5話ぐらいから出てくるのですが、その先はぜひ、ドラマで見ていただければと思います。

そんなことでドラマの撮影が進みまして、そろそろ試写会も行われるとのこと。まだ篤姫が好評のうちに放送されておりますが、実は来年のドラマの第1回目が、つい先日できたばかりです。私も見ましたが、美しい越後の自然を背景に、姿のいい役者さんたちがそれぞれ粒だった素晴らしい演技をしております。まちがいなく大河ドラマ史上、屈指の作品です。安心しました。

この「天地人」のドラマと新潟市のかかわりについて話しましょう。新潟市は私のふるさと、生まれ故郷です。新潟市では私自身の出身地であるということで、展示会も行うそうです。この展示会の内容は、今日、長谷川学芸員と私

がこれから語るようなことを中心に展示が行われまして、天地人・直江兼続と
大国実頼、その下に原作者火坂雅志の視点というものが副題で入るというこ
とで、展示が今年の12月1日から行われ、場所は新潟市に合併になりました旧味
方村役場、今の南区役所の味方出張所で行われるとのこと。展示の中心は
直江兼続という武将、そしてその弟で天神山城の城主であった大国実頼の2人
の予定です。

旧味方村でなぜ行われるのかということですが、その近くに中ノ口川が流れ
ています。中ノ口川は信濃川の分流ですが、かつてはこちらが本流だったとい
うことです。戦国期に直江兼続が16年にわたって河川改修をしたと言いつた
られています。そして、それがゆえに、かつては直江川と呼ばれたという伝承が
あります。中ノ口川で行われた今年の白根の大風合戦は、直江兼続と大国実頼
の風が揚がっております。これは、そういう由来によります。

今日はいつもの講演と違うので、どこから話せばいいのか、私自身、いま戸
惑っておりますが、直江兼続と新潟湊のかかわり、新潟湊をめぐる攻防戦のあ
たりから話をしたいと思います。

この新潟湊をめぐる争奪戦です。これは上杉景勝、直江兼続がいずれ通り抜
けなければならないところでありました。新潟湊は、先ほどの話に出ましたが、
上杉謙信の直轄地でした。上杉謙信は皆さん神懸かりの武将というイメージが
あるのですが、実は経済政策を大変よくやった武将です。新田開発、金銀山の
開発、越後上布の原料となる青苧（あおそ）の殖産興業などをしまして、経済
を大変活性化させて経済大国を作りました。戦国群雄はいろいろいますが、北
は伊達政宗、東海では今川義元、関東には北条氏、西へ行けば毛利氏、島津氏、
そのほかにも群雄はたくさんいます。その群雄の中で一番のお金持ちだったの
は誰か知っていますか。これは上杉謙信だったのです。このことは学者の方も
はっきり書かれております。戦国群雄第一の経済力を持っていたのが上杉謙信
であったと。つまり上杉謙信は、この越後に経済大国を作ったのです。

謙信が能登半島の方で助けてくださいと言えば、ぱっと出陣できる。今度は
関東で助けてくださいと言えば、三国峠を越えて、ぱっと出陣できるというの
は、経済力があつたからです。もし経済力がなければ、行きたくても遠征には
お金がかかるので行けませんと言わざるを得ない。ぱっと出陣できるのは、謙

「義」とは、私利私欲だけではなく、人との信義を大切に、公の心を持つことにあたるといことです。謙信は経済大国を築くとともに、義の精神によって背筋を伸ばした生き方、品格のある生き方というものを模索しました。そういう意味で、戦国時代には特異の武将だったわけです。その謙信の模索したものは、のちのち江戸時代になると、武士たちが研究していくようになります。すなわち、それは武士道として大成されますが、いわば謙信は武士道のさきがけと言ってもいいのです。この経済と義の両立という方法論は非常に優れていた。だから、上杉謙信は、この越後を中心に経済的にも成り立つ、大きな領国を形成することができたわけです。

その中心となったのが湊町でありまして、春日山城に近い直江津、柏崎、そしてこの新潟です。のちに上杉家は、山形県の庄内地方を領有します。庄内地方はやはり米の名産地ですが、その湊町である最上川の河口にある酒田は、北の方では最大の湊町、泉州・堺に模しまして「東の堺」とも呼ばれていたくらい栄えていた湊です。そこを上杉家は掌握していきます。つまり上杉家は、湊、湊に集まってくる富を掌握することによって、この日本海側に大きな領国を形成していったのです。その辺を見ないと、上杉家というものの本質が分かってこない。つまり新潟湊は、そういう意味で、上杉家にとって非常に重要な湊であるから、ここをめぐる5年間も争いが起きたわけです。

新発田重家という武将がいます。皆さんもご存じのように、新発田という城下町があります。その城下町、近世になってからのお城ですが、戦国時代の城主が新発田重家でした。この新発田重家というのは、織田信長と結びます。まず、上杉家のお隣の武田家が織田信長に滅ぼされますが、織田家は、信州、それからもちろん甲斐の国も領します。上州（群馬県）も領します。そして富山県の西半分・西越中まで織田が迫ってくるのです。上杉家は周りを織田に囲まれてしまい、滅亡寸前というところまでいくのです。上杉景勝、直江兼続主従はまだ若いですが、必死になって攻撃を凌いでおります。

このときに新発田重家が、「そうだ、織田と結んで、上杉家を倒せば、自分が越後の殿様になれる」ということで、織田信長と結ぶのです。おそらく織田信長は新発田重家に、「越後半国はお前につかわそう」というようなことを約束していたはずですが、新発田重家はそこで決起するわけです。信長と結んで上杉を

倒そうと、新潟湊を占拠します。湊に集まってくる富を自分が独占しようという事で占拠するわけです。

ところがわずか3か月後、上杉家にとっては奇跡ですし、新発田重家にとっては悲劇が起きます。越中魚津城というのがございます。いまの富山県の魚津市です。冬のブリ漁が盛んのところです。魚津というだけあって大変魚が多いところです。その魚津城で攻防戦を繰り広げ、上杉家は必死に守りました。二の丸が落ち、本丸だけになっても、籠城十三将と言われます吉江宗信、安部政吉、中条景泰、蓼沼(たでぬま)泰重とか、いろいろな越後の武将たちが籠もりまして凌いでいるのです。攻めていたのは織田の中心軍団である筆頭家老の柴田勝家です。信濃海津城には森長可(もりながよし)という重臣が入ります。これは信長の稚児小姓・森蘭丸の兄さんです。上州厩橋城、いまの群馬県の前橋ですが、ここにはやはり織田の重臣・滝川一益が入り、上杉領を囲んでいるのです。そのうえに、新発田重家は新潟湊のドル箱を乗っ取ってしまっている。もう上杉家滅亡のピンチです。

三国峠を越えて、滝川一益が攻め込んでこようとします。軍勢が大体5,000ぐらいでしょうか。それを防ぐにはもう軍勢がないのです。上杉家は助けに行かなければいけない。残っていた軍勢はたった800ぐらいです。その800の軍勢で、三国峠でゲリラ戦を演じたのです。魚沼郡には上田衆という武士団がいるのですが大変強かった。たった800で5,000の敵を追い返すことができました。

ところが信濃の国境から森長可の軍勢が入ってきます。春日山城の近くの二本木までやってきます。それで越中魚津城まで助けに行っていた上杉景勝、直江兼続主従は春日山城へ戻らなければいけなくなる。でも魚津城の将兵らは必死になって戦って、80余日過ぎてもまだ落城しない。結局、落城するのですが、その必死にやっていたことが奇跡を生んでしまうのです。柴田勝家が魚津城へ入りました。ところがその翌日、上方から急使がやってまいります。馬から下り、汗と泥にまみれた使者が柴田勝家の前で告げるには「上様、京本能寺でござ滅亡」と。重臣明智光秀が信長を討つ、いわゆる本能寺の変が起きたのです。これによって上杉家は滅亡の危機を免れました。柴田勝家は前戦に留まっていると、「上杉家は逆襲に転じてくるに違いない」ということで、越前北ノ庄へ帰

ります。森長可も本領の美濃兼山へ戻ります。滝川一益も関東の北条氏と一戦して、神流川の戦いで敗れて、伊勢長島へ戻っていきます。蟻のように群がっていた織田軍が、一兵もいなくなりました。

上杉景勝、直江兼統らは命拾いました。ものすごい高揚感だったでしょう、死を覚悟してやっていたから。おそらく自分たちは滅びるしかないと思っていた。ところが一気に大逆転です。このときの景勝の気持ちを伝える書状が最近出てまいりまして、長岡市の与板で今年展示されました。そのときの景勝の肉声が、会津の蘆名氏の重臣に宛てた手紙なのですが、ものすごい魂のほとぼしりといいますか、戦国というのは、厳しい中でみんなぎりぎりで行っているのだなということが、書状を見ると分かります。もし、興味のある方がいらっしやいましたら、長岡市の与板歴史民族資料館に展示されていますので、そちらで見ていただければと思います。景勝の肉声がほとぼしっている書状を是非、見てください。

このとき、新潟湊を占領していた新発田重家は、逆にがくつきたでしょうね。織田信長は強い、上杉は滅亡するだけだと思っていました。ここで「どうもすみませんでした」と、頭を下げて降参するのが並の武将です。ところが、新発田重家はそれから5年にわたって攻防戦を演じていくわけです。5年間新潟湊をずっと守り続け、上杉家は必死に攻めるのですが、全然、手出しができません。つまり、新発田重家というのは、たいへんな猛将だったのです。戦記ものなどを読みますと、上杉謙信が関東の小田原城を攻めていまして、その退却のときに、10代の新発田重家を上杉謙信に向かって「この退却の陣備えはあまりよくないな」みたいなことをぼそっと言っただけなんです。謙信が怒りまして、このやろうみたいなことになったのですが、わずか10代の少年と謙信が言い争いになったというぐらい、鼻っ柱の強い、勇猛な将なのです。ですから降参しません。

時代はどんどん変わっていきます。京本能寺で信長を討った明智光秀を羽柴秀吉、のちの豊臣秀吉が倒します。豊臣秀吉は柴田勝家も倒しまして、信長の後継者に名乗りを挙げていくのですが、この秀吉が上杉家に声をかけてくるのです。つまり秀吉という武将は何をしたのかと言いますと、織田信長は敵対した武将をすべからず潰しておられます。一網打尽にしているわけです。そして、

侍だけではなく城下にいる一般市民まで殺すというのが信長の晩年の戦い方の特徴です。つまり殺戮（さつりく）主義に走ってしまったのです。

信長は家臣たちに対しても恐怖政治を敷きました。「口答えはならぬ、俺の命令は絶対だ。命令に従え」と。そして「結果を出せ、もし出せなければ追放だ」ということなのです。家臣たちも戦々恐々です。ですから明智光秀が謀反を起こすようなことになってしまった。秀吉は今までの信長のやり方ではだめだ。それでは天下統一はできない。では、どうすればいいのか。殺戮主義というものを捨て、今までの敵対勢力と逆に手を結ぶのだと。そして、自分の家臣たちに対しても、そういう信長的な傲慢なやり方はやめて、情けを持って接していく。そういうやり方をしていくのです。そして、天下を引き寄せていく。

当時、織田の勢力と最後まで闘い続けたのは西では毛利家です。秀吉自身が中国筋で戦っており、備中高松城の有名な水攻めというものをやりました。上杉家も柴田勝家ら織田勢と戦っていた。最初は敵だったのです。その敵方に秀吉はこう言うわけです。「あなたたちはよく戦った」と、「その武勇のほどは、この藤吉郎が一番よく知っている」と、まず相手の名誉を称えるわけです。そして、「自分はこれから安定と繁栄の世の中を作っていく。それには、上杉殿、毛利殿のお力が必要だ。是非、協力していただきたい」と。つまり秀吉が持ちかけたのは連立政権づくりです。与党に入ってください。そして首班指名は、この藤吉郎秀吉にということで、自分が天下人になるのだと。そのために連立政権づくりをしたわけです。上杉家も毛利家も名誉を称えられています。そうなれば乗れない話ではないということで、秀吉の政権づくりに協力します。「話は分かった。受けよう」ということです。

このときに、上杉側の窓口になった人物は直江兼続でした。秀吉側の窓口になった人物は誰でしょう。石田三成です。石田三成が取次役になった。直江兼続は当時26歳、石田三成も26歳、若いです。若いですが、既にお互いに殿様の側近として政治を動かしているわけですから、同じような立場の人間が、出会ったわけです。年齢が近いですから、話も合いますよね。のちのちこの2人はいつも共同歩調でいきます。

ですから、関ヶ原合戦後の際、石田三成と直江兼続の打ち合わせがあったのではないかという話もあります。この2人はつまり友だちであったか、友だち

でなかったかではなく、同じパイプ役だったわけです。お互い一緒に仕事をやらなければ成り立たない関係であった。同一の政治基盤に立ち、それぞれが結ぶことによって、お互いが力を持っていった。上杉家が上方へ出て秀吉に臣従する儀式があります。そのとき大阪城へ行くのですが、何と石田三成は加賀の金沢よりももう少しこちらまで来て、上杉景勝、直江兼続主従を出迎えています。彼が取次役なのです。石田三成は小栗旬さんという俳優が演じます。普通、石田三成はいつも大河ドラマでは悪役です。つまり武功派の武将たちから、主君秀吉におべっかばかり使うということで悪役として描かれることが多いのですが、今回は直江兼続を描いておりますので、石田三成というのは本当はどんな人物なのか。そんなところにも視点を向けて描かれております。

近江人というのは意外に義理堅いです。算勘に秀でておりました経済通ですから、成功する人間が多いです。近江商人には三つの信条があります。売り手よし、つまり売り手がよくなければ商売になりませんから儲ける。それから、買い手よし、買い手がよくないといけない。その商品を買ったことによって買い手も喜ぶ。ああよかったなど。だから偽装なんていけません。誠実な商売をして、ちゃんとした品を提供することによって、買い手にも満足していただく。そして、もう一つが世間よし、その地域がよくなるようにするのが正しい商人道だと。地域への還元ということも商人の使命だということも言っているのです。この近江商人の考えというのは私はすばらしいと思います。そういう基盤にありますから、ただ石田三成はただ金儲けのうまいやつということではない。

三成の父親の肖像画が残っております。非常に厳格な顔をしております。江戸時代の儒学者とか、国学者とか、そういう学者の顔は、どこかに行くと何とか先生といって厳（いか）めしい顔で残っていますね。庄屋さんの顔と云うのでしょうか。教養のある庄屋さん、厳格な父親、そういう人に厳しく子どものころから仕込まれた青年です。ですから、三成像は今までと違うと考えるべきなのではないかということ『天地人』の中で書きました。

話をもとに戻さないと、三成だけで終わってしまいますので、戻します。そんなことで、上杉家は豊臣政権に入り、五大老に列します。筆頭大老が徳川家康です。最初、徳川家康は豊臣家に従いませんでした。ところが上杉家、毛利家が連立政権に入ったことにより、もしそのままいたら、一生野党で冷や飯食

いだと。当時、野党でいるということは冷や飯食いどころではなくて潰されてしまいますから、これはだめだということで、徳川家康も重い腰を上げて上洛するわけです。秀吉の前で臣従を誓って、豊臣政権がほぼ完成していくわけです。

この段階で入った上杉と毛利、そして徳川。家康は功労者というよりも最後に仕方なく入っていった。功労者は上杉と毛利ですので、秀吉はこの両家を大変優遇するわけです。これによって自分の政権は取れたということで上杉・毛利を優遇します。

上杉景勝は、完全に豊臣政権に入りましたので、新発田重家はますます追いつめられていく。でも屈しないのです。新発田重家がここまでやるというのは、すごい男だと思います。世の中はもう変わってしまったのに、新発田重家は、まだ攻防戦を演じているわけです。秀吉も見ろに見かねて、新発田重家に降参しろと条件を示すわけです。上杉家に降参するなら間を取り持とうと、秀吉の使者が行っています。木村吉清とって、のちに奥州50万石の大名になる人間なのですが、葛西大崎一揆が起きて、またもとの小さな侍に戻ってしまいます。この木村吉清が越後にやってきました。新発田の城を訪ねて、これくらいの条件でまとめようと。そのときの描写が残っています。新発田重家は、まげのところに藁（わら）の芯を入れていたそうです。つまりぴんとまげを立てるのです。茶筌まげというのでしょうか、ぴんっと立てて勇ましいのです。朱鞘（しゅざや）の大刀を2本ずぶりと腰に差してあらわれる。そして、使者の木村吉清を前に、鮭を一匹丸ごと焼きまして、どんと出したそうです。それで、どうだこれを食えということで、豪快な男なのです。それが新発田重家。ですから、なかなか頭は下げない。最後まで戦います。

この新発田重家側からは、伯父の新発田刑部という武将が新潟湊に入ってきました。新発田刑部が城を構えた場所はどこか、これは正確には分かっていませんが、新潟は信濃川河口の大きな中州だったわけです。その中州で一番高いところといえば、皆さんも御存じのとおり白山公園のあたりです。あそこは少し小高くなっています。あの辺りに砦を構えていたであろうと想定されています。新潟湊から人質を取りまして立て籠もっています。ですから商人たちは、新発田刑部に妻子を人質に取られているわけですから、命令を聞か

ざるを得ない。

5年間攻防戦を演じるのですが、徐々に重家も追いつめられていきます。籠城戦をやっている新発田刑部も段々力が衰えてくるわけです。そこで、上杉軍が総攻撃を仕掛けようということで迫ります。それにあたって、新潟湊へ上杉軍は魚商人に化けた侍を紛れ込ませたそうです。そして、このままもし攻防戦が最後に行われると、新潟湊は灰燼に帰してしまう、それでいいのかと。それよりも、新発田刑部の首を取って差し出せば、新潟湊は無傷のまま開城することになるから、その道を選んだ方がいいのではないかとということで、上杉方はそれを提案します。

当時の新潟湊を仕切っていた豪商は玉木屋と若狭屋でした。この玉木屋、若狭屋、のちのちまで新潟湊の豪商として続いていきますが、もとは戦国時代に始まっているのです。玉木屋、若狭屋は新発田刑部の首を取って、本当に上杉軍へ持っていきます。上杉軍の最前線基地は木場城、前線基地は三条城です。木場城あたりまで持っていったのでしょうか。なぜ、商人が首を取ることができるのかと思うのですが、実は当時の商人というのは、ただの商人ではないのです。

戦国時代、一番栄えたのは泉州堺、堺南蛮貿易によって栄えた商人の町があります。眼鏡蔵などといわれる大きな高い蔵がありまして、そこから望遠鏡で沖の船を見るためのやぐらのような蔵がたくさん並んでいました。この泉州堺の商人は、実は武力も持っていたのです。お金がありますので、兵隊を雇うことができるわけです。自前の兵隊ではないです。自前の兵隊を持っていると大名になってしまいます。そうではなくて、お金によって傭兵を雇い、何か騒動があると使うわけです。

なぜ玉木屋、若狭屋が刑部の首を取ることができたかといいますと、おそらく彼らは店の中に傭兵を飼っていたのです。例えば商売物が襲われそうになると、その傭兵が守ったり、そういう兵隊をおそらく持っていたのです。ですから、新発田刑部の首を夜中に忍び込んで取ることができた。若狭屋、玉木屋自身が忍び込んでやったとは思えないですから、傭兵を持っていたのです。それによって、新潟は灰燼に帰することを免れ、若狭屋、玉木屋は功労があったということで、その後、大変優遇されていくわけです。彼らはどちらも廻船問屋

でした。船を持つ貿易商です。黒堀をめぐらし門の上から赤松が覗いていたりする、そういう大きな商人です。新潟の豪商はたいてい廻船問屋か、米問屋、この二つがお金持ちだったわけです。新潟湊は、その後、上杉家の支配下に入っていきます。

文献的に証拠がないのですが、このとき新潟湊を支配していたのは、直江兼続かもしれません。直江兼続は執政として上杉家の全権を掌握していますが、佐渡島、酒田湊のある出羽庄内を直江兼続は直接支配しております。ですからそれを見ると、新潟湊は直江兼続の影響がかなり及んでいたのではないかと考えられます。

というのは、直江兼続が新発田重家の乱の少し前に、船江明神に制札を出しております。船江明神は新潟の古町にありました。古町神明町のあたりに船江明神、神明宮と二つ並んでいたのです。新発田重家との争乱が終わりまして新潟湊を完全に掌握した後に直江兼続は、今度は船江の隣の神明宮の方に、自分のおそらく側近だと思われ次太夫という伊勢の御師を派遣してくるわけです。神明宮というのは、伊勢神宮の分社で天照大神を祀っております。次太夫を送り込みまして、その子孫が代々宮司を務めていきます。次太夫は直江兼続から大変優遇されているのです。神明宮には由緒書があります。学芸員の方は由緒書では語れないと思いますが、私は小説家なので由緒書を披露いたします。

神明宮の由緒書によれば、新発田重家の乱が終わったあと、上杉家より米四斗七升二合、社地二千坪の寄進を受けたとあります。と同時に、直江山城守兼続より真筆の「高天ヶ原」の額並びに黒印書を賜り、御師次太夫が神明宮の神職として任命されたと。直江兼続が与えた黒印書の由来から、明治に至るまでの間、諸役が永年免除されていたと書いてあります。次太夫なるものがどういう人物なのか詳しくは不明ですが、実は直江兼続の側近に一志太夫という伊勢の御師がおります。伊勢御師というのは、伊勢神宮に所属しておりまして、お札を配ったり、お伊勢まいりをするときも先導しまして、地方とのパイプ役になります。それが伊勢の御師という人たちで、大変な経済通だったのです。ですから、戦国大名は、この伊勢御師というものを重用します。

例えば、上杉謙信の下にも伊勢御師はおりました。上杉謙信には、経済官僚として、蔵田五郎佐衛門という人物がいます。上杉謙信が川中島の戦いで、信

濃へ出るときに、春日山城の留守居を蔵田五郎佐衛門に任せていたこともあります。なぜなら彼は民政もでき、経済もできるという経済官僚なのです。直江津、柏崎からの積み出される越後上布の原料青苧の売買にも彼がかかわっており、上杉家の経済面を仕切っていた。この蔵田五郎佐衛門が、元伊勢御師です。この蔵田五郎佐衛門には弟がいます。弟がやはり神官を務めておりました。小千谷に魚沼神社という神社があります。小千谷というところは、魚沼地方で生産される青苧の集積地になりました。ですから、のちのち小千谷ちぢみとか、いろいろな織物産業が盛んになるのです。この小千谷の魚沼神社に蔵田五郎佐衛門の弟与三、「よさ」と言うのでしょうか、「よぞう」と言うのでしょうか、それが神官として送り込まれています。つまり小千谷の青苧の集積地を押さえるための経済的な官僚だったのでしょう。神主も務めながらそれをしました。

つまりそういうことを考えますと、新潟の神明宮に直江兼続のお声掛かりで入ってきた経済通の次太夫は、ただ神社の神官として送り込まれたのではなくて、上杉家に組み込まれた、新潟湊の目付役として入ってきたということが想像できるわけです。

上杉家は、新潟湊の商人たちを優遇しました。ですから、新潟湊はのちのち商人のまちとして、自主独立の気風が大変強くなる。これはこの湊をめぐる争いの最終的な始末の付け方、この辺にも由来しています。つまり商人たちが自分たちで政治的な争いの始末をつけた。上杉家はおそらくそういう商人たちに対して、あまり強いことは言えなくなったと思います。湊のことはお前たちに任せたと。あとは税金だけ払ってくれればいいという、つまり自主の気風というものが、その一件によって保たれ、存続することになったわけです。

この上杉家時代は、どういう統治が新潟市でなされたのかということがあまり伝わっていないということも、おそらく緩い統治で、新潟湊は商人たちが自分たちでやっていたのかも知れません。のちのち上杉家は会津若松へ移ってきます。このとき新潟湊は、高田城主の松平忠輝、それから堀直寄、そして長岡の牧野と城主を替えていくわけです。そのいずれも新潟湊のことは町人に任せています。自分たちは税金だけ取ればいいと。そういう仕組みができていたのです。長岡藩政の時代、町人のことは町会所で運営されていまして、代官はやってくるのですが、ほとんど口出しはない。藩が任命した検断と称する

豪商たちが、それをやっておりました。

もう一つ、大国実頼のことが抜けておりましたので、簡単に話します。大国実頼は、直江兼統の弟です、2歳年下。「天地人」のドラマでは、小泉孝太郎さんが演じるようになっております。つまり兄が妻夫木聡さん、弟大国実頼が小泉孝太郎さんという、どちらもいい男同士です。兼統は、主君景勝の代わりに上杉家の政務全般を行う執政です。家臣団中第一番目の石高です。弟はどうか。弟は家臣団中の第二番です。弟も実力があつたのです。この弟の大国実頼、先ほども申しましたが天神山城の城主を務めます。もともと、その城主は小国家といいまして、小さな国と書きまして長岡の小国郷の出身です。それが戦国時代に移ってきまして、天神山城の城主になっていく。これは何と源平時代の源三位頼政の流れを引くという名門中の名門です。

ここに直江兼統の弟、先ほど困炉裏端にいた弟です。兄兼統が納屋に入れられて、弟が御飯を食べていたとドラマの一場面を紹介しましたが、その弟が成長して小国家へ養子に入りました。つまり景勝、直江兼統らは上杉景勝色に塗り替えていったという話が先ほど長谷川学芸員からあつたと思いますが、まさに塗り替えていった一例です。小国家へ入りまして、その家の当主となってしまうわけです。そして大国という名前に、さらに小さいとあまり派手ではないだろうと、大きな国の大国という名前に変わりました。大国実頼となります。彼は連歌の名手でした。和歌が得意だったのです。兄さんの兼統は漢詩が得意でした。兄と弟と一緒に和漢連句の会をやったりします。これは和歌と連歌が交互に交ざったりする非常に複雑な連歌なのですが、彼らは教養人ですので、何の苦もなくそれをこなします。弟の実頼は上方にすることが多く、豊臣家との交渉役を務めるようになります。そして連歌の会を通じて、安国寺恵瓊（えけい）・細川幽斎、里村紹巴ら当時の知識人、豊臣政権の有力者と大変親しい交際をするようになっていきます。それによって、彼は地位をぐいぐい上げていきまして、上杉家の家臣団中第二位の地位まで昇ります。そういうすごい男が新潟市の天神山城にいたのです。兄兼統に勝るとも劣らない才気を彼は持っていたのです。

この兄弟は非常に仲のいい兄弟だったのですが、関ヶ原合戦後、政治路線をめぐって対立し、兄と弟は離ればなれになります。関ヶ原合戦で直江兼統は、

豊臣家に恩義がありますので、ゴリ押しする徳川家康に、「徳川殿、間違っているのはあなたの方だ」と、壮快な直江状というものを叩きつけます。直江兼続は、徳川に敵対する行為を取ったわけです。上杉家は、関ヶ原合戦が東軍側勝利で終わったあとは、路線を切り替えます。そして、徳川幕藩体制の中へ、苦渋の決断で入っていくわけです。

ところが弟は、豊臣とずっと一緒にやってきた人間です。豊臣のシンパと言ってもいい。だから弟は、兄が政治的などころでギアを切り替えたことに対して腹が立っている。そして最後に、彼ら兄弟は反発しあって、仲のよかった兄弟が離ればなれになってしまうわけです。そのシーンは大河ドラマの中でドラマチックに描かれるはずですが。

新潟湊はその後どうなったかと言いますと、江戸時代には長岡藩が支配しましたが、自治独立の気風というものは、大変強く残っていきます。明和年間、長岡藩が新潟の町に 1,500 両の御用金を課しました。当時、新潟湊は不景気に苦しんでいました。そこに 1,500 両の御用金を用立てよとなったのです。半分の 750 両は納めたのですが、あとは納められなくなってしまった。

そこで、涌井藤四郎という町人が「待ってくれ、納入を延期していただきたい」と嘆願書を出そうとした。そうしたら長岡藩が藤四郎を牢屋に押し込めてしまった。そこで町人たちの炎が一気に噴き出してしまったのです。町人の味方をしてくれた涌井藤四郎、みんなが苦しんでいることを訴えようとした藤四郎にそんなひどいことをするなんてということで、一気に怒りが爆発しまして、都市型一揆が新潟に起きたのです。涌井藤四郎は牢屋から救い出されると、町人たちとともに2か月間にわたって民主的な町政を行います。今まで米問屋が買い占め、廻船問屋が買い占めていた米を安く売り出しました。庶民は買えないようになっているぐらい高騰していたのです。そのほか豆腐など、生活必需品をみんな安く押さえた。質屋を増やして低利で融資するという、民主的な政治を彼らは次々と行っていった。

よくパリコミューンの 100 年前に、新潟湊で都市自治政府が成立したなどと言う方もいます。私は昨年、『新潟樽きぬた』という涌井藤四郎の小説を書きました。詳しく知りたい方は、そちらを読んでいただければと思います。さらに、それを原作に「明和義人」というミュージカルも昨年行われました。秋田県の

わらび座の方がこちらにいらしてくださって、3日間にわたって公演されたのですが、これが大変な感動を呼んだ記憶もまだ新しいです。

ミュージカルが終わったあと「初めて新潟に生まれてよかったと思った」という言葉を発していらっしゃった方もいましたが、私は歴史小説家の役目の一つは、地域の歴史を掘り起こすことによって、自分たちの歴史、土地に誇りを持てるようになることなのではないか。そういう埋もれていた話、埋もれていた人に翼を付けて飛ばしてあげる。それが、私は歴史小説家の大きな役割だと思います。それはすなわち、平家物語を語る琵琶法師のように鎮魂の役目も帯びている。それが歴史小説家なのだと思います。

今回、ここ新潟県、越後を舞台に『天地人』という小説を書きまして、それがNHK大河ドラマとして来年1年間、1月から12月まで放映されることになりました。私は、いったいこれはどういうことだったのかなと思い、ときどきふと振り返ることがあります。私自身も作家としてこの小説を書くことができよかったと思うのですが、やはり地域の誇りとか歴史とかそういうものを、皆がもう一度振り返って、ああ自分たちの先祖も捨てたものではないと、こんなすごいやつらがいたのかと自信を持てる。土地に誇りを持てる。大河ドラマというものはそういうものではないかと、私は感じるようになりました。

おそらく来年は、直江兼統という人物はこの越後からまさに巣だって、それがどんどん大きく広がっていくことは間違いないと確信しております。この『天地人』には、現代人にやや足りないもの、義とか愛とか、もう一度振り返らなければいけない世界が描かれています。おそらくどんどん大きな渦となって広がっていくことでしょう。

先日、スポーツ新聞を読んでおりましたら、何とジャイアンツの原監督が『天地人』の愛読者なのだそうです。ジャイアンツは今年の初め、チームが整わなく、けが人も多くてだめでした。ところが、ある時点から快進撃をはじめて、最後には阪神に追いついてセリーグ優勝してしまいました。そのとき、阪神に追いつく前日の新聞に、寝ぼけながらスポーツ新聞を見ていたら「原監督『天地人』を引用」とあったのです。何だろうと思いましたが、快進撃の始まる試合の前に、原監督が選手を集めたそうです。ミーティングで、私利私欲に走るのではなく、君たちもチーム愛に生きてほしいと言ったそうです。そして

愛読書である『天地人』を引用しながら、戦国武将直江兼続の生き様を選手に語って聞かせたそうです。快進撃はそれから始まったとスポーツ新聞に書いてありました。ですから、そう考えますとセリーグ優勝はなんと「天地人」がかかわっているわけです。原監督はWBC（ワールドベースボールクラシック）の監督に選ばれましたよね。そのスタジアムでは、おそらく天地人の旗が、愛直江兼続の旗がひらめくことになるでしょう。世界に向けて巣立っていくことになる、今、冗談で言っていますが、本当になると思います。

私は歴史小説家として、この『天地人』を全力を込めて書きました。そして、開かないはずの扉が開きました。これは私一人の力だけだったのではありません。10年以上にわたって地元の方々が一生懸命運動されていた。その方々が言っておりました。2度にわたって地震に見舞われたときに、それからの復興が大切ですから、運動も頓挫しかけていた。もう終わりを考えなければいけないかなというときでした。そのときに、その苦労が実って、本当に夢が叶ってよかったと。男泣きに号泣されている方もいらっしゃいました。「新潟日報」の記者の方が教えてくれましたが、先祖のお墓の前で号泣していたご老人もいたそうです。その話を聞いて、私も胸が熱くなりました。本当によかったと思います。来年1年間、皆さんと一緒に、私もまたNHK大河ドラマ「天地人」をたっぷり楽しみたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。